



特集

賀川豊彦

その現代的可能性を
求めて

2

「KOBÉ」、その引力と斥力

田中康夫

戦前の流行作家であった賀川豊彦が知己であったかどうか判然とはしませんが、『真空地帯』で知られる戦後に活躍した作家の野間宏は神戸市長田区の出身です。在家仏教の祖師の家に生まれました。処女作の『なんとなく、クリスタル』が文藝賞を受賞したときの選考委員の一人でした。選考会で小島信夫や島尾敏雄は「その描く世界は未知の領域だが、文章は下手じゃないし、構想力もある」という意見だったそうです。その一方で「後生畏るべし」と過大な評価を与えてくれたのは江藤淳です。が、編集者によれば、野間宏は江藤にもまして評価して下さった人なのです。亡くなるまで毎年、「あなたは社会的な物語を書きなさい」と年賀状に震える字で記してきました。

神戸の話です。

神戸は港町だから開明的だ、という一般的通念があります。それは果たして本当でしょうか。

特集「賀川豊彦」その現代的可能性を求めて

37

歴史教科書のなかでは、源平合戦の鴨越（ひよこり）（二一八四年）、楠木正成の湊川合戦（三三三六年）以降、神戸村が開港場となる一八六八年まで五百年以上に亘って、神戸に関する記述は出てきません。神戸は、明治維新で新開地になるまで、無名の農山漁村だったのです。やがて貿易港として発展し、造船所や製鋼所が作られて、各地から人々が吸い寄せられます。なかでも沖縄や九州からの人が多い。朝鮮半島から移り住んだ人もいました。白人もいました。とは言え、日本最初のスキー場、ゴルフ場、テニスコートはできたものの、それらにプラスアルファする文化教養があったわけではないうのです。異人館を建て、チヨコレートやパンを紹介したかも知れませんが、アマゾンの奥地のマナウスのように、オペラハウスが作られたわけではなく、ロンドンのイーストエンドの下町ベスナルグリーンのように、ヴィクトリア&アルバート博物館の分館で入場料無料の子供博物館が設けられたわけでもない。

十九世紀のロンドンでは、インド、パキスタンやバングラディッシュからやってきたクーリー(下層階級の肉体労働者)たちがイーストエンドの一廓で下水道もない劣悪な生活を余儀なくされたように、突如として生まれた貿易・造船・製鉄の街・神戸にも、「クーリー」として沖縄や九州から集団就職してきた人々が大量して、「浜っ側」と呼ばれる海沿いの下町に住み着きます。一方で、『限りなく透明に近いブルー』の舞台では米軍の柵の向こう側にいた白人が、神戸では柵がないまま「山っ側」の高台の地に邸宅を構えて、チヨコレートやパンやクッキーを作り、ゴルフを楽しむ。その中間にホワイトカラーが住むという具合になっていきます。

一九八〇年にデビューした僕は当初、神戸の街は女の子とデートするのに相応しい場所として捉えていました。ところが何度か通ううちに、国道四三号線、阪神電車、国道二号線、旧国鉄(JR西日本)、阪急電鉄と、大阪と神戸を結ぶ国道と鉄道を、浜っ側から山っ側へ越える度に町並みが変わっていく階層社会なのだ、という実態に気付いてしまうのです。それは、大阪から尼崎までの、全てを有りの儘にさらけ出し、お互いに受け止める地域とは少なからず異なるのです。

この街のどこか開明的なんだろうか？

江藤淳は同時代の小説作品を指して「フォニー(Phony)」と言い続けました。文学のまがいもの、という意味です。電話(Phone)を通じて聞こえてくる言葉は、目の前で生身の人間が発する実体とは異なる。それが単語の原義です。江藤流に言えば、総体としての神戸は必ずしも開明的ではなく、取り繕われたフォニーな街、書き割りのような虚構としての、言い方を変えれ

ば、建前と本音・実体が乖離した、ええ格好しいの町なのでしよう。私の常として、乖離と落差が際立つ場に引き寄せられ、そしてやがて、そのまがいものの在処を暴くことになっていくのですね。教育県と言われる一方で満蒙開拓に最も多くの県民を駆り出した大政翼賛的な長野県も、神戸市も、その意味では似通った側面が感じられるのです。

全国の自治体から「株式会社神戸市」としてもはやされ、「山、海へ行く」をキャッチフレーズに、六甲山を削り取って、ポートアイランドなどの埋め立て地を作った公共事業は、大きな注目を浴びました。こうした中、兵庫県庁は日本海側を含んでいるので田舎者、神戸市役所は都会者なのだ、と嘯くようになります。田舎と都会の差を強調するその神戸市は、巨大なベルトコンベアを六甲山中から神戸港へと敷設し、埋め立てを進めます。洗練された国際都市を標榜しながらも、実際に行っていることは百数十年前の新開地神戸の時代と変わらず、富国強兵の発想の高度成長一本槍のままなのです。

市営の神戸空港の例をみてみましょう。

神戸市の中心部から伊丹空港まで車で三〇分、関西空港へも船で三〇分。新幹線の駅があり、高速道路が縦横に走っているところに、わざわざもう一つの空港を作る必要があるのだろうか？「港KOBÉ」を誇りにしている筈なのに、その沖合を埋め立て、船舶の通行条件がますます悪くなるような場所に空港を作ろうとする、それってありなのか？しかも、六甲山の裏側の中国道と山陽道の分岐点付近の原野に作れば最大でも五百億円で

完成するものが、埋め立て費用だけで三千億円、周辺整備事業を加えると一兆円近くになってしまふ。にも拘らず、それまで休眠状態だった事業が、多くの人命が奪われた震災を奇貨とするかの如く、地震発生から僅か数日後に、起債制限比率の赤ランプが点灯していた株式会社・神戸市は、であればこそ、空港建設はどうする、との政府からの照会に「やります」と二つ返事をします。仮設住宅も出来ていない段階で、空港プロジェクトが始まっていったのです。

それに対して私は、桂米朝や櫻井よしこや陳隣臣らの賛同人と一緒に、不要不急ならぬ不要無用だとムーブメントを起こしたのですね。公共事業が良い悪いの二元論ではなく、そのあり方を変えようと考えたからです。長野県知事になってからの『脱ダム宣言』と同じ趣旨の、公共工事の「私たち」と共に「なかみ」を変えようということです。京セラの稲盛和夫は「神戸は近くに二つも空港があるのに、もつと欲しいというのか。我々は埋め立てる場所がないから知恵を使うんだ、京都は」と皮肉を口にしましたが、まさに「なかみ」が不在の、単に自慢出来る「かたち」としてのインフラが欲しいという神戸市の姿勢に対する批判であるとともに、肝心なのは「なかみ」のコンテンツなのだと指摘しているのです。

震災の直後から私は大阪のホテルに泊まって、バイクで被災地に通って来ました。そのスタイルが批判を浴びます、なんでホテルから出かけるのか、と。私はファックスで原稿を送る必要がありますし、汗と埃まみれだから風呂に入りたい、だからホテルに泊まる。そのスタイルがボランティア

アらしくないと批判されました。被災地でシユラフにくるまって寝るのがボランティアの「かたち」であり、「かたち」から外れたあり方は非難されるという不毛さ。極論すれば、私が避難所に寝泊まりしたなら、被災者のスペース一人分を奪うはずなのに。例えば、芦屋の被災していない豪壮な家の娘が、海近くの家がつぶれ親兄弟を亡くして悲嘆に暮れる娘のところから手伝いにいき、夕方は芦屋の家に戻る日々を続けたなら、それはボランティア活動とは呼び得ないのか。私が訊くと、そんな「かたち」はボランティアではないという声が返ってきたものです。

終生、賀川豊彦に付きまとったのは、日本独特の妙な精神論というか「かたち」論というか、社会福祉事業やボランティアはかくあるべしという、即ち高校野球精神的な石頭な心智の持ち主からの批判だったので、と推測します。しかし、食うや食わずでは隣人愛を説けません。実行する体力も気力も生まれません。神父も坊主も、一枚のパン、一杯のお粥を食べられればこそ、腹八分目ではなく腹四分目でも隣人愛を説けるのです。逆に、腹九分目になっても私利私欲を求め続ける人は独占禁止法の領域に入ってしまう、神の見えざる手が働くのでしよう。

賀川豊彦は豊富なアイデアの持ち主で、本田宗一郎と同じように自らが永久運動体となって様々な取り組みを実行していった人物です。謂わば自身のOS（オペレーティング・システム）やアプリケーションを、自分の都合ではなく、社会の希望に応じて、どんどん変化させていける人だったので、ところが、その変化に付いていけなかった人たちに限って、賀川に批判の目を向けるのですね。OSの転換が出来ない自分たちの至らなさを認めた

くないから、「高校野球」の精神論と似通った不毛な「かたち」論に拘泥してしまう。真のリーダーを生み出し得ない未熟な民主主義の悲劇でもあります。

何故、賀川豊彦は、ボランティア活動の場所として、神戸を選んだのでしょうか？

それは恐らく、私が神戸に引き寄せられたのと同じく、本音と建前の乖離が甚だしい街だったからではないかと想像しています。港町としてのK O B Eは、ファッショナブルな装いとは裏腹に、その誕生から「階層社会」だったのです。ナポリやマルセイユを例に挙げるまでもなく港町には、はしけ船作業に従事する沖仲仕に象徴される階層が存在し、それを取り仕切るアンダーグラウンドな世界が裏社会を構成しています。

阪神・淡路大震災も、大半の人々が自宅に居た午前五時四六分に起きたことで、それまで存在した階層差がもつと開いてしまったのではないのでしょうか。震災発生四日後から被災地に通い詰める中で痛感したのですが、電気が復旧するまでは、家族を亡くした人も自宅を失った人も、もつと言えば、家族も自宅も無事だった人も、誰もが被災者だったのです。「闇の中の共同体」の一員だったのです。けれども、電気が通じた瞬間から共同体の中に「差異」が生じていくのです。水道やガスが復旧すると、更に大きく変わっていきます。そうして、極めて大きく色分けすれば、人命も建物も、山側と比べたなら浜側は遙かに大きな被害を受け、賀川が直面し格闘した神戸の階層社会は顕在化していくのです。

賀川豊彦の運動が、サブカルチャーとしての段階から、大きな潮流とし

てのメインカルチャーに発展していくと、貧困や階層がなぜ神戸に集約して現れるのか、その体制の成り立ちそのものと立ち向かわざるを得なくなります。組織のためではなく人間のために活動を続けた彼は、行政のため、組合のため、団体のための都合から超越出来ない、つまりは、質的な変化や改善を必ずしも求めない、総論賛成・各論反対な人々にとっては次第に、確実に、好ましからざる存在となっていくのです。既得権益が失われる事を彼らが恐れたからです。そうして、賀川の運動が本質的な部分に触れば触れるほど、賀川は神戸に居るのが辛くなっていったのだと私は思います。

その賀川は、関東大震災の直後に、東京の下町へと駆け付けます。被災者を助けようという思いと同時に、自分自身でチェスの駒の色を変えるように、違う場所へと「転地」したい思いを抱いていたからではないでしょうか。その意味で、賀川は神戸から出ていった人の一人だといえる気がします。

空港建設は不要無用とムーブメントの展開で週に三日も四日も神戸入りしていた時分、ポートアイランドでの集会のためにレンタカーを運転して島へと橋を渡って行くと、曰く言い難い高い高揚感に包まれた経験が幾度かあります。それは飛行機が離陸していくときの高揚感にも似て、この町は永遠に発展していくのかもという錯覚ですね。恐らく「株式会社神戸市」に集った政官業の人々は、神戸は永遠だ、だから海を埋め立てればいい、神戸空港を作り、さらに関西空港へと地下トンネルで結べば滑走路二本の大

空港だと夢想していたのでしよう。あたかも子どもが永遠の夢を抱くように。が、その結果は莫大な借金と、売れ残った埋立地だったのですね。

神戸の人たちは「しゃーないな」という言葉を口にします。開明的と言いながら、結局は長いものに巻かれるので、ピラミッド社会を認めてしまおう、しゃーないな、と。でも一方ではチョコレートと異人館と六甲山の緑、そして海があるから自分たちはすごいのだ、という自己像に耽溺してしまうのかも知れない。なにせ、この私ですら、高揚感を抱いてしまったのですから。何とも皮肉な話ですが、小学生から老人まで県民ならば誰もが暗唱している県歌「信濃の国」で、「海こそなけれ、物さわに、万足らわぬ事ぞなき」と自画自賛している長野県と、似ているのですね。島国根性という点で。愛国心も一歩間違えると、エスノセントリズムに陥りがちです。

筆一本の人だったとは言え、野間宏も書齋の人ではなく、ゲンガー・ジユマンとして狭山裁判などの差別事件や社会的事件に積極的に関わり、多くの作品を残しました。野間もまた神戸から出て行って大成した人です。そして、私が神戸の地で震災ヴォランティアに参加する遙か以前に彼は、社会的物語を書くようにと語り続けてくれました。

本音と建て前の落差、その乖離が発する臭いを、賀川は嗅ぎ付けていたのではないでしようか。階層社会の矛盾に引き寄せられ、けれどもその「しゃーない」風土に耐えきれずに出ていった人が、賀川だったように私は思えます。キリスト者として使命感や社会主義の観念だけでなく、彼独特の優れた「暗黙知」が働いていたのではないでしようか。賀川は、神戸を捨てたわけではないにせよ、そこから出ていくことで心身共に身軽になり、東京の下町で今で言うところの「グラミン銀行」的な新しいプロジェクトに創意を発揮していったのだらうと思います。

永久運動体としての賀川についていけず、「かたち」崇拜の立場から批判したり黙殺したりする人々が大勢いたことでしょう。であるとすると、家族も労働も環境も、その「かたち」だけでなく「なかみ」も一変した二世紀の日本に生きる私たちは、賀川豊彦という人物を殊更に偶像視するだけでは、学ぶべき物を学びきれないと思います。「賀川豊彦献身一〇〇年記念事業全国委員会」が企画するさまざまな記念事業が、単なる一〇〇年記念事業という節目の「かたち」に留まらぬ「なかみ」を感じ考える瞬間を、今この瞬間も真つ当に働き・学び・暮らす人々に与える機会となる事を願っています。

クォーター
季刊

at

[あと] 南北問題と
現代思想をつなぐ

編集:オルタートレード・ジャパン
/at 編集室

15号

オルタナティブ
もう一つの〈回路〉のために



その現代的
可能性を求め
て

賀川豊彦

特集



特別増ページ

柄谷行人

普遍宗教は
交換様式Dとしてのみ出現した

山折哲雄

抑圧された賀川思想の回帰

田中康夫

「KOBÉ」その引力と斥力

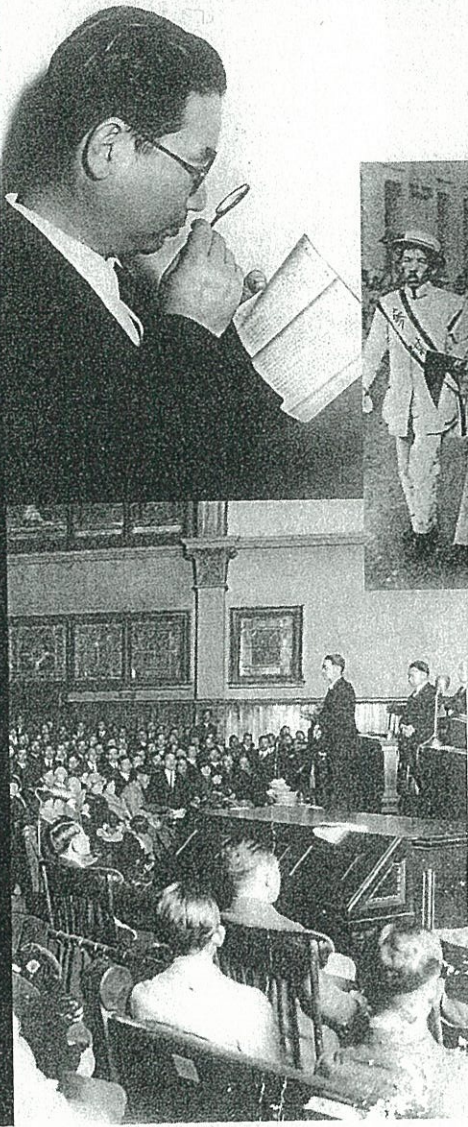
加山久夫 栗林輝夫 倉橋正直
増田大成 澤口隆志 小南浩一
池田雄一 外山恒一 杉浦秀典

連載

上野千鶴子 | 山下範久

ケアの社会学 第13章

ポスト・リオリエント 第5回



1921年、川崎・三菱造船所の労働争議を指導して賀川豊彦はデモの先頭に立ち、官憲に拘束された

賀川豊彦

その現代的可能性を求めて

季刊[あっと]

at
15号

◎日本近代を代表する社会運動家にしてキリスト者、小説家でもあった賀川豊彦は、戦後社会においてほとんど忘れ去られている巨人である。貧困救済から始まった彼の膨大な業績の中に何を見出すのか、経済恐慌と格差拡大の現在、私たちの歴史的想像力と社会的構想力が試されている。

◎賀川が関わり創始した社会運動はじつに多様である。労働運動、農民運動、生活協同組合運動、共済組合、医療組合、幼児教育、セツルメントなど、百科全書的広がりを示している。それらを買いて、賀川思想・信仰の根幹には、友愛＝相互扶助のエートスがあり、全運動を駆動させていたことに思い至る時、戦後の社会政治運動が何を欠いていたのか、その反省の機縁を得ることになるだろう。

◎賀川豊彦の名前を知らないでも、日々の生協運動に関わる女性たちは一千万人のオーダーに達している。生協にかぎらず、賀川の撒いた種は各地各領域で枝を伸ばし花を咲かせている。今こそ、それらの意義を吟味し、より大きな展望と連携の中に据え直すことは、苦悶する資本主義と国家を内発的に超えるオルタナティブな回路を準備するだろう。本特集がその一端に連なることを願ってやまない。